

公開講演会

「聴く」ということ
—聴覚障害児教育の現場から見えてくるもの—

講演者：安積力也（恵泉女学園中学・高等学校校長、前日本聾話学校校長）

日 時：2002年5月15日（14:50-17:20）

場 所：本館262

「聴く (listen) ということ」は、「聞く (hear) こと」と異なり、音源に対する明確な「関心」を基礎とする。ここでいう「関心 (concern)」とは、単なる「興味 (interest)」を超えて対象とのかかわりあいにつながっていくものである。30秒ほど目を閉じて耳を澄ませばわかるように、われわれは周囲のきわめて雑多な音源から選択的に音や声を「聴いて」いる。聾の子供と母親の最大の問題は、音を通じたコミュニケーションが絶たれているため、相互の関心を基礎にした人間の最初の関係性（自分にとって大切な人の声を聴き分ける能力）が築きにくい点にある。

日本聾話学校ではこの点に注目し、手話は一切使わず補聴器を使って残存聴力を活かす一方、壊れた母子関係の修復のために、スタッフは子供と遊びつつ母親を励ます。とりわけ罪悪感や疎外感に苦しむ母親が、過剰な責任意識や自己犠牲の感情から解放され、いかに子供にかかわり、手ではなく心をかけるようになるかがポイントになる。具体的には、母子間で「目を合わせること (eye contact)」、「関心を共有すること (joint attention)」、「代わりばんこ (turn taking)」の3つの要素が重要となる。同校は「聾哑」ではなく「聾話」学校として、世界的レベルのユニークな教育を行っており、日本ではキリスト教主義に立つ唯一の私立聾学校である。

私自身はICU生時代に、「自分以外に関心がない」という自分を発見してショックを受け、人にかかわる仕事がしたいと思い敬和学園の教師となった。十数年でようやく自らの経験から語れるようになったところに、日本聾話学校からの招聘を受けた。断ることはできたので迷いに迷ったが、祈るほどに後ろめたく、神からの絶対命令として引き受けることになった。いわば言葉を武器にそれまで教師をやってきた自分が、今度はそれを捨てて全く新しい教育の世界に投げ込まれたわけである。

障害児（者）に対しては、一般に医療・福祉・教育の三者の連携が必要であるが、医療が“impairment”、福祉が“handicap”を扱うとすれば、教育は“disability”に向き合う。自分はこれまで、相手の中にある小さな光を感受し、わずかの能力の可能性にかけることこそ教育の役割だと思ってやってきた。

日本聾話学校での教育はやや特殊な例ではあるが、あらゆる対人サービスに必要な普遍的な要素を含んでいるかと考え、現場での経験をお話させていただいた。